トルストイと老子

末包丈夫

トルストイの文学創造は主我的な自己解剖の上に立っている。これは個人的な魂の救済を目的とするものであるが、それは結局、自我の否定、自己抹殺に導いた。単なる自己抹殺は魂の救済にならない。そこに生じた矛盾に彼は大いに苦しんだ。苦しめば苦しむ程、矛盾の解決を宇宙の絶対者の中に求めようとした。「懺悔」の中に次のような一節がある。「此の蘇生感と絶望感とは一体どんなものであるか。神の存在に対する信仰を失った場合には、私は生きていないのと等しかった。神を見出そうと云う微かな希望がなかったら、早くに私は自殺していたに違いない。神を探求している場合にのみ私は生きているのであった。真に生きるに足る気持で生きているのであった。」①

神を求め、人生の意義を探し求めたトルストイにとって、「老子」を知ったことは大きな意義をもつものであった。この小論の課題は、トルストイが「老子」に如何に近づき、如何に読み、何を得たかについて、歴史的順序に従って考察してみることにある。

トルストイの老子研究は二期に分けられると思う。

前期　一八八四年――一八九〇年、初歩的研究、日記や手紙に感想を発表する。

後期　一八九一年以降、露訳「老子」の改訳に協力する。著作の中に「老子」を引用する。

前期

トルストイは若い頃カザン大学でアラブ、トルコ東洋語学部を選んでおり、早くから東洋に対する興味を持っていたが、彼が実際に「老子」に関心を示し始めたのは一八七八年からである。同年一月三日付エヌ・エヌ・ストラーホフ宛の手紙の中で、「あなたは老子を何から引き出したのですか。」[2] と質問している。一八七八年はトルストイに於ける最初の精神的危機の只中にあった。その前年一八七七年八月二十五日のトルストイ夫人の日記には次のように述べている。「彼の中では宗教的精神がますます強まりつつある。幼年時のように彼は毎日祈禱に立ち、祭日毎に勤行に行く。……金曜と水曜には精進料理を食し、他人を非難する者には冗談交りに戒めて、いつも謙遜について話をする。」[3]

彼の精神的危機は早くも、「アンナ・カレニナ」の執筆中から始まっている。その頃の彼の手紙に左の如きものがある。

「私は二ヵ月間インキで手を汚し、思想で心を穢しています。今私が退屈で下らぬ「アンナ・カレニナ」を書いているのは、一日も早くこれを終了して他の仕事に移りたいからです。」[4]「私のアンナは辛い大根のように私を苦しめています。性質の良くない養女同様、私の手に負えません。」[5]

当時の彼の心境を「懺悔」は次の如く語っている。「他の何よりも長い間この残酷な真理（註死のこと）から私の眼を反させていた二滴の蜜――家族に対する愛と、私が芸術と呼ぶ著作に対する愛すらが、私には最早甘く感じられなかった。」[6]

家族に対する愛、芸術創作に対する愛をも失ったトルストイは、「懺悔」を境にして、ひたすら福音書をはじめ古今東西の聖賢の書を渉猟し、それらの中に自己の精神の支柱を求めた。

一八九一年の彼のある手紙[7]の中に、過去に於いて感化影響を受けた書籍の名と、影響の度を、大、甚だ大、尤大の三

段階に分けて述べている。感化影響の大きかった書名を年齢別に二、三拾ってみる。十四歳迄、聖書の「ヨセフ物語」感化尨大、「千一夜物語」感化尨大。二十歳迄、「マタイ伝」感化尨大、ルソーの「懺悔録」感化尨大、「エミール」感化尨大、ディツゲンズの「デヴィッド・カッパーフィールド」感化尨大。二十五歳迄、ゲーテの「ヘルマンとドロテア」感化甚だ大、ユゴーの「ノートルダム・ド・パリ」感化甚だ大、プラトンの「ファイドン」「饗宴」感化大。五十歳迄「オデュッセイア」「イリアス」感化甚だ大、ユゴーの「レ・ミゼラブル」感化尨大、エリオットの小説、感化大。六十三歳迄（当時の年齢）、「福音書（ギリシャ語）」感化尨大、ジョージ・ヘンリーの「進化と貧困」感化甚だ大、パスカルの「感想録」感化尨大、エピクテトス、感化尨大、「孔子「孟子」感化甚だ大、「仏陀」「老子」感化尨大。

右の手紙によっても、トルストイが五十歳（一八七八年）までは、主として古今の文学書を読み、五十歳以後は、頓に哲学や宗教書に偏り、特に東洋の聖賢の書に深く傾倒して大きな影響を受けたことを知るであろう。

一八八四年三月になってから、彼は暫く中断していた日記をつけはじめているが、その三月六日のところに「老子の翻訳の仕事[8]」と記している。当時彼はジュリアンの仏訳「老子」から露訳を若干試みている。九日の日記には「老子の書を読む」と記している。その数日後の日記には「亀鑑とすべきは老子の言の如く、水である。障礙がないと流れる。堰があると止まる。堰が破れると漏れ出す。四角の器に入れると四角であり、円い器に入れると円い。それだから水は何物よりも重要であり、何物よりも力強い。」と述べている。これは老子（第八章）によって、所謂トルストイズムの根底をなす自我没却、無抵抗主義を表明した最初のものであろうと考えられる。同年十一月の日記には「孔子の中庸の教は驚くべきものである。みな老子と同じである。――自然の法則の成就、これは理性である。力である。生命である。この法則の成就は音もなく香をもっていない。それは道（タオ）である。それは単純で、目に見えない時も威力をもっている。」と述べて、道（タオ）の哲学の概要に触れている。

その頃の諸家宛の手紙の中にも、老子推奨の文章が数多く見られる。「外面的な謙遜や高慢などを抜きにして申しま

すが、私などは、孔子、仏陀、老子、エピクテトス、福音書等の輝く太陽にも比すべき人類の聖賢、永遠の真理の太陽とも云うべきものの下では、仄かに光るランプの如きものです。[9]」の手紙はその一例である。

後期

一八九三年はトルストイが老子研究に最も熱中した年である。その最初の重要な発表は同年八月の「止まりて考えよ」（副題「無為」）と題する小論である。これは後に述べるポポフの露訳の「老子」を一読して、その感銘の下に執筆したものである。

老子第三十七章「道は常に為すことなく、而も為さざるなし」、第六十三章「無為を為し、無事を事とし、無味を味う」、第四十九章「聖人は常の心なく、百姓の心を以て心と為す」に基づく無為哲学の大要を紹介した一文である。老子によれば、人類の災禍は人間が必要なことをするのを怠るところから生ずるのではなくて、種々の不必要なことをするところから生ずる。従って人が若し老子の「無為」を行うならば、単に個人的な災厄を逃れるのみでなく、またあらゆる政治的社会的な不幸をも免れるのであると述べている。

老子の無為説に深い共鳴を覚えたとみえて、その頃の日記には屢々その感想が述べられている。当時の日記の中から二、三を拾ってみる。

一八九一年四月一日「黙想する。老子の偉大なる真理——Le non agir 無為——何も為さず、何も恣意しない。ただ一身を委ねてもよいと考えられるものに委ねる。流れに、神の意志と一致するものに身を委ねる。若しも流れの水一滴がそれぞれ好む方向へ流れて行けば、水は力を持ち得ず、何事もなし得ないのだ。」

一八九一年十月五日「老子は云う。世には容器の空所、こしきの空所、ふいごの空所の如く、使用に際して大切な役割をする空所がある。これは自由——決してあり得ない政治的自由などでなくて、内的自由であり、欲情からの自由で

あり、それが無くては偉大な事が全然遂行し得ない自由である。即ち人がそれをもつならば、全能者たり得る自由である。」

一八九五年二月十五日「黙考する。与えるところが大なれば大なる程、与えられるところも大である。老子にふいごの比喩がある。ふいごから出る空気が多ければ多い程、入る空気も多い。若しも人が、その生活は霊の中にあって、肉体は材料であり、霊のための飲物でありパンであると確信できたら、その時何と自由であり偉大であろう。この思想に到達した時、久しく忘れていた感動を経験した。」

老子の「無為」思想につらなるトルストイの自我の滅却、無私無欲への自制は、若い頃からの道徳的規範であった。一八五二年六月二十九日二十三歳の時の日記に、「自分の幸福をその目的とする人間は悪い。他人の意見をその目的とする人間は弱い。他人の幸福をその目的とする人間は美徳的であり、神をその目的とする人間は偉大である。」一八五四年七月七日二十五歳の時の日記には、「私は善を愛する。それを愛するような習慣を作ったのである。故に善から離れる時自分は不満である。」と述べている。

さきに述べたイエ・イ・ポポフの露訳「老子」は、トルストイが協力し改訳されることになった。一八九三年十月三十日ヴェ・ヴェ・スタソフ宛手紙の中でトルストイは、「私が大分昔、八年程前にジュリアンからどうにかして少し訳したもの、つまり手がけたままうっちゃっていたものを、今ある友人が全訳しましたので、その翻稿の改訂を頼まれています。」と報じている。また九月二十一日付妻への手紙には、「……エウゲニイ・イワノヴィチが筆記しています。私達は偉大な思想家老子の翻訳を読み直し、訂正しています。毎回喜びと熱意とをもってとりくみ、仏訳本[10]と特に立派な独訳本[11]とを対照して、正しく伝えようと努力しています。」と述べ、十月五日の日記には、「ポポフ滞在。われわれは独人シュトラウスによって老子を訳した。何とすばらしいものだろう。小冊子に仕上げねばならない。」と記している。また同月トルストイがヴェ・ヴェ・スタソフ[12]と、シュトラウスの独訳老子に対する支那学者達の見解を照会した時、新

にレッジ（Legge）の英訳本を一部入手している。しかし英、独、仏訳の老子を参考にしたトルストイとポポフの協同改訳の仕事は、その後屢々中断した。翌年一八九四年五月にわが小西増太郎[13]の露訳老子がペテルブルグの雑誌に発表された関係もあって、改訳の仕事は完全に中止された。後にトルストイは、その原稿に省略と訂正を重ねて、漸く一九〇九年に脱稿、翌年発表した。それは外形内容とも原本と可なり変ったもので、「老子の金言」と題され、「老子の教」と題する二枚の序文をつけられた。この序文に就いては後述する。本文は「老子」八十一章のうちから、部分訳を含めて四十三章を訳したもので、それを「金言」六十四章に細分したものである。章に長短があり、訳文に直訳あり、意訳ありで、配列も原本によっていない。例えば、「老子」第六十二章の中段「故に天子を立て、三公を置き、拱璧ありて以て駟馬に先つと雖も、坐して此の道に進むるに如かず。」を、「皇帝となって、四頭立の馬車で行くのが如何に愉快であろうとも、坐して道を行うに如かず。」と訳して、「老子の金言」の第五十五章としている。

前記の小西増太郎の老子訳文がモスクワの雑誌に発表後、一八九四年末の一ヵ月許り、トルストイは小西氏の露訳老子の改訳にも協力している。当時のトルストイの老子研究は可なり深いものがあったとみなければならない。

一九〇三年トルストイは「毎日に於ける聖賢の思想」を書いている。各国の各時代の作家や賢人の作品の抜萃や金言、思想を集め、それにトルストイ自身の文章を挿入した文集である。日課として毎日読むように暦式になっている。うすでの文集であるが、「老子」からの抜萃は三十三ヵ所に出ている。

一九〇六年から執筆にかかり一九〇九年に脱稿した「読書の環」は、右の「毎日に於ける聖賢の思想」の形式を取りながら、その量に於いては、「戦争と平和」「アンナ・カレニナ」の次に位する浩瀚な書である。トルストイはこの文集の作成の意志を早くから持っていたらしく、一八八四年三月十五日の日記に、「（読書の環）を作る必要がある。エピクテトス、マルクス・アウレリウス、老子、仏陀、パスカル、福音書――これらはすべての人に必要である。」と記している。「読書の環」には「老子」から二十六章が選ばれ、二十八ヵ所に引用されている。

一九一〇年（死亡の年）に書いた「人生の道」の中にも、老子からの引用文が十三カ所に出ている。本書は、「神」「愛」「無為」等それぞれの表題をもつ小論文三十一編から成るものである。トルストイが第一の精神的危機（「わが宗教一八八三年）と第二の危機（「われ等何を為すべきか」（一八八四年―八六年）を経験した後、二十数年の間に探求し、到達した彼の人生観、、確乎たる宗教的信念を吐露したものである。如何に生くべきか、の質問に対する彼の最終的回答と見るべきものである。その一節に次のように告白している。「われわれにおくられた十字架、これはわれわれの活動の基盤となるものである。われわれの全生涯はこの十字架の活動なのである。若しもこの十字架が病気であれば、従順に病気を甘受すべきである。若し人々からの侮辱であれば、悪に報いるに善を以てすべきである。若しも虐遇であれば、従うべきである。若しも死であれば、感謝をもって受け入れるべきである。[14]」

次に「老子の金言」「毎日に於ける聖賢の思想」「読書の環」「人生の道」等の中で、「老子」が如何に語られているかに就いて考察してみようと思う。

右の諸書の中で見出し得る「老子」からの引用文は、四十九章の中にあるものである。残りの三十二章は、トルストイが思想的に理解しがたい章か、或は、陰、陽、載営魄等の如く、理解困難な言葉を含んだ章である。

最も屢々見出す引用文は、老子の世界観、道（タオ）を説明した章である。「人生の道」の中の論文「神」の中には、左の二節がのっている。「理解する事の出来る理性は永遠の理性ではない。名前を付ける事が出来る実在は最高の実在ではない。老子[15]」。「これなしには天もなく、地もないと云う実在がある。この実在は穏かで、形体をもたない。その特質は愛と呼ばれ、理性と呼ばれる。しかしこの実在は名前をもたない。それは非常に遠くにあり、また非常に近くにある。老子[16]」。両文とも「老子」の第一章と第二十五章によったものと思われる。トルストイは絶対世界の実在、老子の「道（タオ）」をここでは理性と呼び、愛とも呼んでいる。

老子の処世観、無為の教を説いた諸章の中、ふいごの比喩、水の比喩の諸章は、トルストイの気に入ったところ。日

記の記録については既に述べたところである。「上善は水の如し」の第八章は、「老子の金言」「毎日に於ける聖賢の思想」「読書の環」の三書の中に、「江海の能く百谷の王たる所以は」の第六十六章は、右の三書と「人生の道」の中に、「天下の柔弱は水に過ぎざるはなし」の第七十八章は、同じく四書に引用されている。「人生の道」の中の「謙遜」の中には、右に述べた水の比喩の二章の外に、この比喩を敷衍説明した文章が二カ所ある。また老子第四十三章「此の世の一番弱い者が一番強い者に勝ち、低く謙遜な者が高く傲慢な者に勝つ。しかし、謙遜の力を解する者は此の世に少数である。」[17]の一文もあり、「自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。（ルカ伝十四―十一）」と並べられている。老子の無為の教は、トルストイにあっては、神の認識とその信仰への道である。

「人生の道」の中の「無為」は、前述の「止まりて考えよ」に類する内容のものであるが、「老子」からの引用文は見当らない。無為の最高の道徳性を説き、実践をすすめたものである。「何よりも先ず現在人々が行っている無駄な仕事をすべて止めることである。わがヨーロッパの社会に於いては、そう云う無駄な仕事が、人々の事業全体の九十九パーセントを占めている。（中略）肉体的にまた精神的に現代の人々を苦しめているそれらの不幸や矛盾対立を除去する為に、千九百年の昔人類に予告された神の世界を招来するために、現代の人々には唯一つの事、道徳的努力が必要である。[18]」と述べている。

無為の教は、トルストイにあっては、信仰への道であると同時に、神の国なる、自由平等、国民皆労の共産主義的理想社会の建設への道である。「我が信仰の所在」の中で彼は次のように述べている。「キリストの教は地上に神の国を建設する。この教の実行は困難だと云うのは正しくない。それは困難でないのみか、その教を知った者にとっては避けられぬことである。[19]」トルストイのこの思想は、帝政ロシヤの圧政と搾取、不平等の中に苦しむ一般民衆の良心が母体となって、キリスト教と内外の自由解放運動を背景に生れたものである。老子の無為の教は、第五十二章の「襲常」への道、第五十九章の「長生久視の道」、安心立命への道である。

老子の時代は原始共産制の崩壊時代である。覇道思想が世を支配し、支配者は強権をもって被支配層に臨んだ。「王とその手下どもの完全な専横が、都市農村の住民に対して行われていた古代中国の奴隷制社会の条件下では、積極的な抵抗の思想は、当時の多くの進歩的な人々には現実性の乏しい、実行不可能なものと考えられていた。[20]」とアレクサンドロフは老子の無為哲学の発生の理由について述べている。田所義行氏は次のように説明している。「明らかに被支配者の側に立って被支配者と共に、被支配者へ積極的に安心立命を保させるような思想が、被支配者を中心として中国社会に要求されたのであるが、これに応ずるものとして、老子の思想が見出されたとみることが出来よう。[21]」

老子の学問、文化批判の章、第十九、三十八、四十八章の三章を、トルストイが好んで多く引用しているのも容易に理解ができる。

老子の政治思想を説いた第四十九章「聖人は常の心なく、百姓の心を以て心と為す」は、三書の中に引用されているが、第六十章、第八十章は一句も引用されていない。社会の不正と専制政治を排しながらも、地方分権制をとり、放任主義によって自然裡に教化すると云う宿命論的政治思想は、トルストイの諦め難いところであろう。宿命論はトルストイには無縁である。

これに反して、老子第六十三章の「怨に報いるに徳を以てす」の言葉は、四書の中に引用されている。第三十一章の「兵は不祥の器なり、君子の器にあらず」は「読者の環」の中に、第六十八章の「善く士たる者は武ならず」は三書の中に、第八十一章の「天の道は、利して害せず、聖人の道は、為して争わず」は、「毎日に於ける聖賢の思想」の中に見出される。但し、第六十七章の「夫れ慈にして以て戦えば則ち勝ち、以て守れば則ち固し」の章は、トルストイの作品中に見出すことが出来ない。絶対無抵抗主義者のトルストイの承服し得ないところであろう。

トルストイの絶対無抵抗主義については一八八九年の次の手紙によっても凡そ理解できる。「真のキリスト教徒は常に、狂人の自由を奪うよりも寧ろ狂人に殺される方をよしとするでしょう。[22]」

トルストイの無抵抗主義に関連して、前述のアレクサンドロフは次のように述べている。「老子の無為主義から、時には悪への抵抗が不可能でしかも不必要だとする結論がなされた。善は吾之を善とし、不善は吾も亦之を善とす。善を得るなり。信は吾之を信とし、不信は吾も亦之を信とす、信を得るなり、と老子は言っているが、敵に対しても友に対する如くせよと云うこの誤った思想から、後の反動思想家達は搾取階級にとって甚だ便利な結論を作り出している。彼等は、人民に服従と忍従を説いて、抑圧者達に対する闘争心を抑制するために、このような思想を利用してきた。……トルストイの如き偉大な作家も、老子の思想を「悪への無抵抗」思想の補強の為に利用した。[22]」

トルストイの悪への無抵抗主義は、老子によって補強されたと言うのは正しいであろう。しかしトルストイの無抵抗主義は悪に対するに暴を以ってしないと云うのであって、悪に対する批判と抗争は、自虐的な迄の自己批判の激しさと共に、時の権勢に毫も怯することなく激しかったのである。

暴力について「人生の道」の中に次の如く述べている。「あらゆる暴力は人の心を和らげず、それを激昂させるだけである。故に暴力では人々の生活を改善し得ないことは明らかである。[23]」

前述の「老子の教」（一九〇九年）は二頁に足りない短文であるが、トルストイの老子観を知る上に最も重要である。それには次のように述べている。

「老子の教の根本は、一般の真の大宗教のそれと同じである。人間には各々肉体の外に、万物の中に存在し全世界に生命と幸福を与える無形の霊がある。従って、人間は唯自己の幸福のみ願って、自己中心に生活することもできるし、また万物に内在し全世界に幸福を与える無形の霊中心に生活することも出来る。人間は肉の為に生きれば、老、病、死があって禍である。霊の為に生きれば、霊には老、病、死がないから仕合せである。人間の生活が禍でなく仕合せであるが為には、人間は肉の為ではなく、霊の為に生きることを学ばねばならない。このことを老子は教えている。老子は肉の生活から霊の生活へ如何にして移るべきかを教える。彼は自分の教を、この移行の道を教えるが故に、道（タオ）と呼んで

いる。（中略）この道は、老子の教に依れば、何も為さぬこと、或は肉体の欲することは出来る限り少く為すこと、同時に肉体の行動によって万物の中に存在する天の力（老子は神をこう呼んだ）が、人間の霊の中に顕現するのを妨げないように、霊の欲するところを抑制しないようにすることにある。（中略）この思想は、ヨハネ第一の手紙に示されているところに似ているどころか、全く同一であり、キリスト教の教義に基づくものである。老子の教によれば、人間が神と結びつく唯一つの道は道である。道はあらゆる個人的な肉体的な節制によって得られる。ヨハネ第一の手紙に示される教もまた同じである。ヨハネの教によれば、人間が神と結びつく唯一の道は愛である。愛は道と同じく、個人の凡ゆる肉体的なものの抑制によって得られる。老子の教によると、道と云う言葉には、天との結びつきの方法と、天自体とが含まれており、またヨハネの教によると、愛と云う言葉には、愛と神自体とが含まれている。（神は愛なり）である。双方の教の本質は、自己を個々のものと不可分のものと、肉体的なものと精神的なものと、一時的なものと永久的なものと、動物的なものと神的なものとして、認識する点にある。自己を精神的なものとする認識に到達するには、老子によれば、唯一つの道がある。その道を老子は、最高の徳の概念をもつ道と云う言葉でもって表現している。この認識は、人間固有の本性によって得られるものである。かくして老子の教の本質は、キリスト教の教の本質と同じである。双方の教の本質は、一切の肉体的なものの抑制によって、人間の生命の根本である霊的神的な本源を顕現させる点にある。」

右の老子とヨハネの教の同一論に対しては、勿論当時のロシヤに於いても反対があった。神学的立場から、エス・エヌ・ドウルイリンは大要次のように反駁している。

キリスト教の本質を明らかにしているものは、正しくヨハネ第一の手紙であるが、それは神の子イエス・キリストの愛についての教である。この愛は、「主は、わたしたちの為に命を捨てて下さった。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟の為に命を捨てるべきである。」ところの愛である。ヨハネ第一の手紙に一貫している神の子、神人、贖罪、愛の観念は、老子に限らず他の中国の教義には無縁なものである。愛と云う言葉がもつ観念は、老子の教の中には全く見当

らない。他の中国の諸教義と異なって、老子の教は禁欲主義の上に立つけれども、キリストの教とは異なるものである。[26]

道の本質について、ソヴェト・アカデミーのアレクサンドロフは次の如く述べている。「そこには人道的法則もなく愛の法則もない。万物は自らの法則に従って生々発展し、消滅して行く。神霊の力も人間の意志も、物の所在と活動を、道の本質を変えることは出来ない。万物は来世の力の介入を受けず、自ら変転する。道は何ものにも依存しない。道は自らの本性に従って前進し行動する。道は万物の母である。[27]」

老子の「道」が宗教でないことは定説である。田所義行氏は次の如く述べている。「老子はその根源として所謂神を認めず、また虚空の本体に於いても無為自然の道に於いても意思を認めず、万物生成の母である天地にも恣意も意志もないのであるから、老子は純然たる観念論者でもない。しかるに老子の本体とする偉大なる無限定の有者である虚無なるものは経験的認識を超越するものであって、実証科学の対象としては認識困難なるものを含んでいるので、老子を純然たる唯物論の立場にあるものとも断じ難い。強いて言えば、老子は素朴な唯物論的世界観をもつものであるといわれよう。[28]」

ここに於いて、トルストイの老子とヨハネの教の同一論の誤りなることは明らかである。誤りはトルストイが老子の道の本体を神であると認めた点である。しかし彼は屢々その著書の中で、宇宙の絶対者を神、真理、理性、生命或は愛と云う言葉で表現しているので、「老子の教」の中で道を神と述べたのも、観念論者トルストイとしては、当然のことと言えよう。老子の無為思想の高い倫理性に感嘆共鳴した余り、彼の信奉するヨハネの教と同一レベルに於いて、老子を推奨したのだと思う。彼の老子ヨハネ同一論は、彼の強い説得力ある文章がもつ、彼一流のレトリックと見做さるべきであろう。

トルストイの芸術作品の上に及ぼした「老子」の影響に就いては、稿を改めねばならないが、一言したいことは、両

者の処世観の近似性からして、トルストイが老子に接近しない一八八〇年代以前の作品「戦争と平和」「アンナ・カレニナ」等の中に、既に、謙遜、忍苦、自己犠牲等の「老子」らしい思想が見られることである。これは聖書やルソーの自然に帰れの思想の影響と見るべきである。従って後期の作品「闇の力」「イワン・イリィーチの死」「復活」等の中にその影響が見出ださるべきである。

註

① Ubilcinoe izdanie pervogo polnogo sobraniia sochinenii L. N. Tolstogo tom 23, str. 45（以下書名のないのは本書である）

② この手紙に対してストラーホフは「私は老子をジュリアンの著（Le livre de la voie et de la vertue, par Lao-tseu）から引用したと答えている。

③ tom 23, str. 14

④ 一八七五年八月二十五日フェート宛の手紙 tom 62, str. 166

⑤ 一八七六年三月八日ア・ア・トルスタヤ宛の手紙 tom 62, str. 257

⑥ tom 23, str. 14

⑦ 一八九一年十月二十五日エム・エム・リデルレ宛の手紙。リデルレはペテルブルグの書籍出版販売業者兼子供向き作家

⑧ tom 25, str. 534–535

⑨ 一八八七年八月十六日ルコヤノフスクの郡長エヌ・デ・ワーロフ宛の手紙 tom 64, str. 61

⑩ 註②参照

⑪ (Lao-tse. Tao-te-king. Uebrsetzt und commentiet von Victor von Strauss. Leipzig 1870)

⑫ Vladimir Vasilievich Stasov Lao-si.（一八二四—?）は十九世紀後半ロシヤに於ける音楽、建築、絵画、彫刻等芸術一般にわたる学者

⑬ 小西増太郎はキェフ神学校に学び、当時モスクワに滞在、モスクワの帝国図書館所蔵の四種の支那原本から老子を露訳して、一八九四年の「哲学と心理学の諸問題」誌に「Lao-si. Tao-te-king, ili Pisanie o nravstvennosti」と題して発表した。発表後トルストイの訳文訂正を受け、一九一三年になって、同書名の下に「Pod redaktsiei L. N. Tolstogo: Perevod s kitaiskogo D. Konissi Primechaniia S. N. Dorylina Moskwa 1913」と附記してモスクワで出版された。

⑭ tom 45, str. 443
⑮ tom 45, str. 65
⑯ tom 45, str. 65
⑰ tom 45, str. 412, 413
⑱ tom 45, str. 351
⑲ tom 23, str. 432
⑳ G. F. Aleksandrov : Istoriia sotsiologicheskix uchenii Drevnii vostok Moskva 1656 str. 202
㉑ 田所義行著「老子の研究」四十八頁
㉒ アメリカの牧師エル・ジ・ウイルソン宛手紙 tom 63, str. 270
㉓ 註⑳の二一三頁
㉔ tom 45, str. 214
㉕ tom 40, str. 350-351
㉖ Lao-si Tao-te-king ili pisanie o nravstvennosti str. 58–56
㉗ 註⑲の二〇〇頁
㉘ 註⑳の一〇三頁

本論文は「東洋と西洋に於ける老子の理解」というテーマに対する昭和三十五年度同志社大学人文科学研究所よりの共同研究助成金による研究成果の一部である。